

情報収集癖は先祖のDNAがなせるものか？～雅楽演奏家の家に生まれて～

成果普及部門 地質標本館 豊 遙秋



地質標本館と私

地質標本館は、地球科学に関する我が国唯一の総合博物館の役割を果たしています。またその名が示すように我が国最大の地質標本を収蔵・管理する標本センターでもあります。

さて、私はこのような地質標本のうち鉱物について同定、分類研究を行う専門家として1981年4月東京大学総合研究博物館から当館に配属されました。以来21年余り鉱物標本の名称、産地等を確認し、時には最新の分析機器を使って同定作業を行い分類体系に基づいて整理をしてきました。すでに約36,000点の鉱物標本がデータベース化され、登録・管理されています。

現在、世界に産する鉱物種は約4,000で、植物が40万から50万種、昆虫が180万種と言われていることから決して多いものとは言えません。しかし、鉱物は種に固有の外見を示すことは稀で、一般に産地が異なると形も色も、随伴する他の鉱物種も異なります。或る鉱物標本について、色や形だけでなく随伴する鉱物や、その標本の産地等から鉱物種名を特定するためには、できるだけ多くの文献に目を通すとともに、実物の標本を可能な限り多く見て情報を収集する必要があります。いわゆる「経験がものを言う」世界でもあります。

「石くれ小僧」と呼ばれた小学生時代

1953年、小学校の先生に連れられて伊豆大仁に行ったことが、私と鉱物との最初の出会いでした。ハンマーで石を割ると中から色々な形、色の鉱物が

現れ、その見掛けが異なるにもかかわらず同一種であったり、他の随伴する鉱物にもそれぞれ名前がつくことを知り、植物や昆虫にはない「多様性」に強くひかれました。それ以来、上野の国立科学博物館に通っては本館1階のフロアに並んだガラスケースの鉱物標本を眺め、ノートにスケッチをしたり、わけもわからず学名や化学組成をメモしました。時には館の鉱物の先生を訪ね直接説明をしていただいたり、研究室にころがっている鉱物標本のかげらをねだってはもらって帰りました。当時の先生方は私のことを「石くれ小僧」と呼んでいました。中学高校時代は何処かに珍しい鉱物が出ると知ると夜行列車を乗り継いで採集に出掛けたものでした。また、家が近いことから当時川崎市にあった地質調査所の標本室にも、まるで恋人に会うような気分で通いました。それから数10年して、そこで見た標本に地質標本館で再会するとは思っていませんでした。

伶人の家系に生まれて

私が鉱物と出会わなかったらどうなっていたか。実は疑いなく宮内庁の楽師として、皇室の祭事に欠かすことのできない雅楽の演奏に携わっているに違いありません。私の家は、約1,000年間歴代の天皇の下で楽人として朝廷に奉仕してきた伶人の家系で、系図を見る限り殆ど絶えることなく現在に至っています。記録のはっきりしている豊原有秋(970年没)から数えて私は38代目ということになります。豊(ぶんの)の姓は豊原の一字をとったもので、江戸時代から使用しており、男子

は有秋、遙秋のように秋の字をつけます。我が家には歴代の先祖の残してくれた、当時の雅楽の楽譜や舞の作法、相伝の秘曲や、笙についての記録等の資料が多く残され、統秋(1450～1512)の著した「體源抄」は笙技の秘伝口伝を主に、楽道全般から宗教、文学、和歌等について記した古典文学としても重要な楽書です。この中で統秋は、応仁の乱の乱世に貴重な楽器や資料が散逸することを目の当りにし、このような楽書をまとめたと言っています。また、我意私慾だけの世を憂い、禁中の楽人が意欲を無くし、ろくに精進もせず家系家名だけを権威にいかげんな演奏をしたり、大衆に迎合して俗曲を演奏して金を稼ぐ事をなげいています。そのなげきは、そのまま今日にも通じるような気がします。

珍しい鉱物を追求めて

私の先祖の情報収集癖は家系固有のもののような気がしてなりません。時秋(1098～1179)が後三年の役に陸奥に赴く源義光を追って足柄山で笙の秘曲を授けてもらった説話(戦前の修身教科書より)などは、珍しい鉱物があると聞くとどこであっても採集に飛び出した昔の私にダブらせてしまいます。

私が持っている鉱物に関する情報は未知の鉱物との出会いを容易にし、初代の地質調査所長の名を冠した和田石を始め4つの新種発見に関わることができたのは鉱物や冥利につきます。

なお、我家に伝わる楽書等の古資料は豊家39代目の楽師となった息子が継承しています。